謠曲（上卷）

校註

日本文學大系

第二十卷

大正十五年七月二十五日印刷
大正十五年七月二十八日發行

日本文學大系
第二十卷

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
二一八八番
振替東京五二二九八番

解題

謠曲

文學博士　尾上八郎

平安朝時代の終近くになつて、公卿の時代が武家の時代と變つた。而して明治維新以前まで續いた。公卿の重んじたところは感情である。故におのづから感情中心時代といふべきものが成立した。武家の尊ぶところは意志である。故に意志中心時代といふべきものが連續した。

公卿は、學問を朝夕の業として、それによつて養成せられた優美な藝術を有つてゐた。武家は弓箭を友として、功名手柄を手がけ、藝術を疎外した。それは、その支配者が、公卿の陷つた弊竇をよく知つてゐたからである。力を以て力あるものを統御しようとするには、必ずかくの如くなければならぬ。この故に、非職の才藝として、藝術的のものを排斥する必要があつた。かくして、武家の代は永續したのであるが、人間は藝術なくしては生活し得ぬ。何等かの形によつて、

武家は、その一類の理解し得、享樂し得る藝術を得んと欲した。その要求に應ずべき種々のものが、これによつて顯はれた。それらの中に、田樂があり、猿樂があつた。

上代に於ける我々の祖先は、極めて貧弱な、單純な歌舞、音樂しか有つてゐなかつた。天岩戸の前のそれ、天稚彦の時のそれ、國史の上に記載せられてゐるものの、後者の如く晝夜に渉つたとは云へ、簡單なものの繰りかへしに過ぎなかつた。元來律語的に物を言ふこの時代に於いて、歌は早く成立した。それによつて、問答をもした。歌垣、歌かゞひ等、舞踊と歌謠と相伴つて發達するのは自然であつた。これには、都の手振の著しいものがあるとともに、地方色のきはやかなものもあつた。それらの名は、殊舞、隼人舞、國栖人の舞等種々であつた。

その中に、三韓との交通が繁くなるとともに、その樂が渡來した。聖德太子が出で、文化的施設に努力せられたので、それらの樂は奬勵せられた。推古の朝には、百濟人味摩之が歸化して、伎樂を將來した。太子は、これを大和の櫻井に住ましめ、少年等をして學習せしめられたと云はれる。これら以外に、齊明天皇の朝には、度羅樂も傳へられた。然し三韓樂が、主として採用せられたのである。奈良朝に入ると、すでに輸入せられてゐた唐樂も盛んに行はれ、又、渤海、林邑等の諸樂も這入つた。これらも、併せ用ゐられたが、年とともに、これらに熟達した邦人が出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て、平安朝に入ると、嵯峨天皇の頃には、新曲の作成もあるやうになつた。從つて、外國の舞曲も、漸次日本風に改造せられて、著しく優雅となり、華麗となり、當代の色彩の著しいものとなつた。藤原氏が勢を加へるとともに、これらはいよ／＼盛んに用ゐられて、事あれば奏樂があり歌舞があつた。

この外來樂、及び摸倣日本樂が盛んである一方に、日本固有のものが改造せられ、發展せしめられた。奈良朝に、大和舞、久米舞、東舞、五節舞などもあつたが、平安朝になつて盛んに起つて、神樂、催馬樂もはじまつた、朗詠も起つた、今樣も出來た。これらが、貴紳の遊樂の助けをした事は云ふまでもない。しかし以上のものは、たゞある歴史的、又は現在的の所業を摸するのみで、劇としての要素を、十分に備へたものではなかつたらしい。これの漸次整つて行つたのは呪師猿樂だの、延年舞だのの興起に俟たなければならない。更に、それの一層進んだと思はれる田樂、猿樂の盛行に俟たなければならない。

農作は單調であり、多くの勞力を要するものである。これは、何物かで醫せられねばならぬ。この用をしたものは、簡單な歌舞であつた。これの、搢紳の間に認められ、その遊宴の餘興とせられたのが、田儛である。恰も、催馬樂、風俗歌等が、貴族に愛誦せられたと同樣である。しか

し、農民の歌舞は、別な發達をして、こゝに田樂が始まつた。榮華物語御裳著の卷に「田樂といひて、怪しきやうなる鼓、腰にゆひつけて笛吹きて、佐々良といふものつき、樣々の舞して、怪しの男ども、歌うたひ、心地よけにほこりて、十人許りあり。……かしこにては、我儘に、ののしり遊びたる樣ども、いみじうをかし。」とあるのが、それである。今昔物語にもまた類似の記事がある。堀河天皇の永長元年に、盛んな田樂の催があり、大江匡房がそれを書いた洛陽田樂記には「……初自閭里、及於公卿、高足、一足、腰鼓、振鼓、銅鈸子、漏木、殖女、春女之類、晝夜無絶、喧嘩之甚、驚人耳。」とある。これは誇張もあるであらうが、流行の勢のいかに盛んであつたかが推察せられる。これで見ると、これらの人々のする事は、編木等をもつて唄ひ踊る固有の田樂的のものもあり、高足、一足などといふ曲藝的のものもあり、また劇的にある所作を演ずるものもあつたのである。乃ち僅かに地方賤民の間に奏せられたものが、種々の舞曲に促されて著しい發展をして、都人士の間に行はれるまでに到つたのである。田邊尙雄氏は、その原因を二つに分けて(一)は、伎樂が寺院の餘興樂となり、後に、神佛混合の結果、これが全國的に擴まつて田野の民踊に、大影響を與へた。(二)は、唐の散樂及び雜藝が、奈良朝以後多く輸入せられ、これがまた神社、佛閣の餘興に加はつたため、民謡に多少の影響を與へてゐると云はれてゐる。

伎樂は、すでに散樂的のものであつたであらう。これが、民間に入つたのも事實であらう。從つて從來滑稽趣味の多かつた民間に、多くの曲藝的、諧謔的要素が加はつたのであらう。

田樂が漸次發展したと同時に猿樂が進歩した。猿樂は、散樂の轉化である。その散樂は、伎樂から轉化したものであらうか。味麻之が將來した伎樂は詳かにせられないが、隋の散樂であらうと、高野博士は云はれてゐる。それはその滑稽的な所業が雙方一致してゐるのみならず、その樂器と面との間に交渉があるからである。この散樂の名は、すでに貞觀の頃、又元慶の頃に記載があるが、いづれも人をして大いに咲はしむとあるのによつて、滑稽的所業は明白である。この名が「さるがう」と訓まれて、枕草子にも處々に用ゐられてゐる。

この滑稽的所業は、朝廷の儀式の後にも行はれた。嚴肅な儀式の後に、頤を解いて、窮屈さから脱するのに、これは極めて恰好なものであつたであらう。堀河天皇の御時の御神樂の夜に、職事家綱、行綱の兄弟が、或は庭燎のめぐりを繞つて「よりちう夜ふけて。」と云つたり、或は「何する竹豹ぞ。」と云つたりしたのは、それであるが、畢竟、茶番、二輪加の類であり、卽興的であるのに興趣があつたのであらう。卽ち、同じ者を反覆しては趣味がないので、新作を唱嗟に出したのに、價があつたのであらう。併し、すでに專門的に、これらの滑稽的所業を、やゝ系統的に

するものもあつた。藤原明衡の新猿樂記に擧げた「獨相撲、獨雙六、無骨有骨、延動大領之腰支、慢漉舍人之足付、冰上專當之取袴、山背大御之指扇、琵琶法師之物語、千秋萬歲之酒禱、飽腹之胸骨、蟷螂舞之頭筋、福廣聖之袈裟求、妙高尼之襁褓乞、形勾當之面埋、早職事之皮笛、目舞之翁體、巫遊之氣裝貌、京童之虛左禮、東人之初京上。」等は、皆それであるらしい。これらは大體さへ明らかにしてないが、「都猿樂之態、鳴河之詞、莫不斷腸解頤者也。」とあるから、滑稽至極のものであつたであらう。しかし、これらの中の、「唐術、品玉、輪鼓、八玉」等は、曲藝に屬するものであつたらしい。乃ち、猿樂は、物眞似もすれば、曲藝もするのである。この點に於いては田樂も、猿樂も、大抵同一であつたものと考へられる。

鎌倉時代になつて、平家琵琶が起り、宴曲が行はれたが、それらよりも興味があると考へられて、武家が殊にこれに傾倒したのは、延年その他の舞もあるが、それよりも、田樂、猿樂であつた。感情的でなく、意志的であり、藝術的でなく、武強的である武家は、公卿とおなじ趣味を樂しむべく、餘りに古典的教養に缺けてゐた。故に、解し易い、感じ易い、平易なもの、しかも滑稽味のあるものを鑑賞した。田樂、猿樂は、恰度、それに適當するものであつた。すでに、腸を斷つたり、腹を抱へたり、「一城之人皆如狂。」あつたのは、都人士であつたが、この時は、關東の

武士も、またそれと同樣の狀態になつた。田樂には、本座、新座などといふ座の分ちも出來てゐた。北條高時はこれらを寵愛して、その演技に浸つてゐた。太平記に、「入道入興のあまりに、宗徒の大名たちに、田樂法師を一人づゝ預けて裝束を飾らせける間、これは誰がし殿の田樂、かれは何がし殿の田樂なんどいひて、金銀珠玉を渥しくし、綾羅、錦繡を飾れり。宴に臨んで一曲を奏すれば、相摸入道を始めとして、一族、大名我劣らじと直垂、大口を脱いで抛げ出す。これを集めて積むに、あたかも山の如し。その費え、幾千萬といふ數を知らず。」と云つてある。これも誇張に相違ないが、鎌倉武士が、これに惑溺してゐた事は確實である。北條氏が滅んで、足利氏が起つた。この時南北對立で戰塵の靜まらぬ世ではあつたが、その戰も、無い時が多いのであるから、武士は飲酒、博奕、更に田樂に溺沒した。殊に尊氏は、これを好むこと、恰も高時のやうであつた。貞和五年に、四條河原で催された勸進能は、尊氏をはじめ、幕府の重臣が皆列席して見物した、それのみならず梶井法親王も臨ませられた、その時、樓敷が倒壞したので、「田樂の將棊倒の樓敷には王ばかりこそ上らざりけれ。」と云はれた如く、上らぬのは天皇御一人であつた程の上下の熱狂さであつた。併し、この演技は美麗ではあるが、簡單らしいものであつた。まづ立合がある。それは鼓を鳴らし、笛を吹き立てると、東の樂屋から、「粧ひ紅粉を盡したる美麗の童

八人、一樣に金襴の水干を著して」練り出でると、西の樂屋から、「白く淸らかなる法師八人、薄化粧の鐵漿黑にて、色々の花鳥を織り盡し、染め狂はしたる水干に、銀の亂紋打つたる下濃の袴に下括りして、拍子を打ち、綾藺笠を傾け」て出てくる。これらが所作をして了ふと、猿樂がある。新座の樂屋から、「八九歲の小童に猿の面を著せ、御幣を差上げて、赤地の金襴の打懸に、虎の皮の貫を蹴み開き、小拍子に懸けて、紅綠の反橋を斜に蹈んで出でたりけるが、高欄に飛び上り、左へ廻り、右へ巡り、跳ね返つては上りたる有樣、誠にこの世のものとはみえず。」といふ具合であるが、見物は、「あら面白や堪へ難や。」と喚き叫んだのであつた。小童の動作は明記してあるが、僧侶の立合は、役者の扮裝の描寫にのみ力が入つて、肝心の演技は省畧せられてゐる。しかしこの時、「戀の立合」といふのがあつたといふ世阿彌の明記があるので、その曲の一は知られるのである。この繁昌は猶續いたが、曲目は明らかでない。すこし後の文和年中の河原の勸進田樂には、「四匹の鬼」といふのがあつた。また次いで「炭燒の能」といふのもあつたと、世阿彌が記してゐる。これらは、すでに曲藝ではなく、立派な能であつたらしいが、詳細は知られない。しかし、これらによつて、名人、上手も出て來た。太平記には、阿古、彥夜叉、道一等の名がある。これらは、奏樂或は曲藝の專門家であるらしい。本座、新座の一忠、花夜叉、藤夜叉などは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

歌舞の役者であつたと見える。その中で、一忠は、ことに秀でてゐて、觀阿彌も「わが風體の師なり。」と云つたと、世阿彌が述べてゐる。この外にも、增阿彌などいふ名人が出るには出たが、大手腕家がなかつたのみならず、當時の爲政家の保護が、猿樂ほどでなかつたので、その長所は猿樂に奪はれて漸次衰微するに到つた。文安の頃の文安田樂記に、同三年の番組は、一番勢田の春敲門の能、二番女沙汰の能、三番北野物狂の能、四番尺八の能、五番なるこの能、六番書寫の能、七番法然上人の能、八番小野小町の能、九番屏風の能、十番實方の能等の名目があるが、傳はるものの少ないのは、人々の口に上るほどの興味を喚起しなかつた證據であらう。この後に到つては、殆んど聞えるものがない。僅かにあるものは、たゞ三番だけであるといふ高野博士の說がある。すべて、猿樂に壓せられて衰微してしまつたのである。

この田樂と併んで繁昌し、獨り永久の榮を見せてゐるものは、猿樂である。このものは、前時代に、すでに萬人の翫賞を得てゐるのであつたが、高貴の御覽に供すべく御所へも參入するに到つた。併し、これと田樂とは殆んど同樣の事を行つて、その區別は判然しないものであつたらしい。ところが、この方面に天才者が出て、卓拔な見識と技倆とを以て、他の諸曲を統一し、綜合し、ことに田樂の長所を自家藥籠中のものとして、立派な樂劇を成立せしめたのである。この天

才者は、乃ち觀阿彌、世阿彌の兩人である。殊に世阿彌その人である。元來流行はしたといつても、たゞの藝人に過ぎないので、能役者は、特に、社會的尊敬を受けるべき地位にはゐなかつたのであつた。然るに、こゝに偶然足利義滿が現はれて、これの保護者となつて立つた。義滿は、義詮の後を受けて、強豪な地方の大名を壓服して、權勢を中央に收め、眞に武家の中心の爲政者となつた。室町幕府の基礎が十分に固まつたのは、この人の力であつた。この政界の中心人物が永和四年の今熊野の猿樂に、當日の大夫の觀阿彌の舞をめでて同朋の列に加へたのみならず、その子の世阿彌元清をも殊愛した。これは、慥かに世間を驚かしたことであつたが、猿樂の位置はこれで向上した。而して、すでに漸く曲藝的、滑稽的所業から轉じて、優美、高雅な樂劇と變じてゐた猿樂は、武家の式樂となるに從つて、その嚴肅さをも加へて來た。而して、滑稽的の方面は、狂言を出した。

元來猿樂の家は諸國に散在してゐた。そしてその附近の神社に附屬してゐた。和屋、勝田、主門は、伊勢にあつて伊勢大神宮に、山階、下坂、比叡は近江にあつて日吉神社に、本座、新座、法成寺は、丹波、河内、攝津にあつて賀茂、住吉兩神社に、更に圓滿井、結崎、外山、坂戸は、大和にあつて、春日神社に奉仕したといふ。この中、近江と大和のがすぐれてゐたが、その藝風

は異なつてゐた。併し、その後者に綜合的傾向があり、現代的色彩があつたので、大いに時好に投じたのであつた。この大和の四家は、圓滿井が金春、結崎が觀世、外山が寶生、坂戸が金剛であるが、この中の結崎、乃ち觀世の家に、觀阿彌清次が出て、また世阿彌元清が現はれたのである。この以外に喜多が起つたが、これは江戸時代の初期の事である。

以上の諸家の中で、圓滿井が最も古いと云はれる。この家に、後嵯峨天皇の時、古い謠物十六章を賜はつた　これに音曲を加へて、今の能を仕始めたといふのは、信ずべきでないが、その十六章は、曲舞といはれるのである。この曲舞は「應永年内より以來のうたひ物。」と世阿彌が云つてゐるので、あまり古いものではないことが知られる。勿論うたは、簡單なものであつたが、追追發展して、かなり長い一曲を作り上げたのである。觀阿彌、世阿彌は、これを採用し、或はそれを變更し、或はそれに前後を加へなどして、自家の發展の資とした。兩人はまた、「一忠はわが風體の師なり。」「一忠、犬王、龜阿、是當道の先祖といふべし。」と田樂談議にあるが如く、田樂の名人を尊崇して、その風體を摸しなどした。殊に世阿彌に到つては、犬王、喜阿、更に觀阿の長所を取つて一にしたものであつた。而して、こゝに、從來と異なつて立派な樂劇が作り出されたのであるから、この猿樂は、新猿樂として目すべきものである。乃ち從來の曲藝的の分子はす

つかりなくなり、更に滑稽的の所業も跡を絶つて、極めて眞面目な、森嚴な、而して深意義なもの、いはゆる幽玄の趣深いものとなつたのである。

新猿樂の所傳、構成、理想等を窺ふに十分なものは、世阿彌十六部集である。これによつて見ると、新猿樂は、三道から出來てゐる。それは、種、作、書である。乃ち第一に、能の種を知る事、第二は、能をつくる事、第三は、能を書く事である。第一の、種、乃ち材料を得ることが、すでに容易でない。舞歌二曲の態をするに適すべき本説の人體を得ねばならぬ。しかし、時によつては、本説にない事を、新たに仕出すのもいい。そして、種を得たならば、第二に序、破、急五段の建立をしなければならぬ。が、時によつては減じて四段にもなり、また增して、六段になつても差支はない。これが出來ると、第三に、出物の品々によつて、それ相應の詞を書かねばならぬ。しかも、そのいい詞は、仕手に云はせる樣にせねばならぬ。これで全體が出來上るのであるが、その曲中の人物に、種類がおのづからある。それは、老體、女體、軍體の三つである。老は老人、女は女人、軍は軍人である。以上の三類の外、時に放下、遊狂を出す事もある。これを軍體の末風、碎動の能として、更に一條を立ててもゐる。これによつて、五體が出來上る。これらに熟達したのが名人である。觀阿彌は大男であつたが、女能には細々となり、自然居士などで

黒髪を著、高座に直つたさまは、十二三歳にも見えたほどであつたといふ。かく熟達したのみでは十分でない。この上に、幽玄の趣が全體を貫いてゐなければならぬ。「古風には、田樂の一忠、中頃當流の先士觀世、日吉の犬王、これはみな舞歌、幽玄を本風として、三體相應の達人なり。」(能作書)と世阿彌は云つてゐる。觀阿の名のあつたのも、「靜が舞の能、嵯峨の大念佛の女ものぐるひの物まね、ことに〳〵得たりし風體なれば、天下のほうびめいばうを得しこと、よもてかくれなし。これ、いうげん無上の風體なり。」(花傳書)といふにある。故に、「幽玄の花種を本風として、能を作書すべし。」(能作書)といふことになるのである。

幽玄の語は、平安朝の末から使用せられてゐる。それは、主として歌に於いてである。俊成、定家等が、歌の評語に用ゐるとともに、自己も、その趣味に沉潛しようとした。勿論、自己の作全部がそれであらうと希求したのではないらしいが、それに入ることが、重要な自己精進の路であるとした。これを強調して、自己の藝術の極致としたのは、恐らくは新猿樂の創始者が始まりであらう。「およそ、この道、和しう、江州において、風體かはれり。江州には、幽玄の境をとりたてて、物まねを次にして、かゝりを本とす。和州には、先物まねを取り立てて、物かずを盡して、然もいうげんの風體ならむとなり。」(花傳書)と云つてをるから、近江猿樂も、大和猿樂も、

ともに幽玄といふ事を唱へてゐたと考へられるが、これも幽玄を主とした眼で見たために出た語かも知れない。實際、新猿樂以前の人がかく云つてゐたかは、些か疑はれるが、その境地に憧憬してゐたことは明らかであらう。しかもこれを擴充して基礎觀念としたのは、新猿樂の人々であらう。「諸道、諸事に於て、幽玄なるをもて上果とせり。ことさら、當藝において、ゆふげんのふうてい第一とせり。」(覺習條々)と云つてあるが、更にかうはいふものの、これをよくする人はない。これは幽玄の眞味を知らぬからであると云つて、その說明を試みてゐる。まづ「抑幽玄のさかひとは、まことには、いかなる所にてあるべきやらむ。」と云つて、つぎにそれを具體的に述べて、風趣を以て云へば、「公家の御たゝずまひの、位高く、人ばうよにかはれる御ありさま、これゆふげんなるくらいと申すべきやらん。しからば、たゞうつくしく、にうわなるてい、ゆふげんの本體也。」言語から云へば、「言葉やさしくして、貴人上人の御ならはしのことばづかひを、よくよくならひうかがひて、かりそめなりとも、口よりいださんずること葉のやさしからむ、これことばのゆふげんなるべし。」音曲から云へば、「ふしかゝりうつくしくくだりて、なひ〳〵と聞えたらんには、是音曲の幽玄なるべし。」舞から云へば、「よく〳〵ならひて、人ないのかゝり、うつくしくして、しづかなるよそをひにて、見所おもしろくば、これ舞の幽玄なり。」扮裝から云へば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.